

■部会名：高齢化・市民活動部会

■部会長（有識者委員）：佐藤 克之 委員

■市民委員：景山 奨 委員、岸本 佳廣 委員、小島 忍 委員、佐々木 愛 委員

■概要

1 部会長報告について

佐藤部会長：第1回市民会議での市長の挨拶にもあったように、本格的な少子高齢化・人口減少社会における計画づくりであるという点と、少子高齢化に伴って社会構造が変わった中での計画づくりである点、自治基本条例にもとづいて新たに市民協働でつくる計画である点が重要である。自治基本条例には「市は、政策の立案、実施及び評価の各段階における市民参加を推進し、市民の意見が適切に反映されるよう努めなければならない。」「市長等は、広く市民の意見を聴き、その意見を反映させるための仕組みづくりに努めなければならない。」と書かれている。そして、この市民会議の目的は「江別市におけるまちづくりの指針となる新しい総合計画を策定するにあたり、江別市自治基本条例に沿って、市民の皆様のご意見を反映していくこと」であり、検討事項としては「江別市新総合計画策定方針における基本構想の「まちづくり政策」、(仮称)みらい戦略の「戦略テーマ」について検討・協議して、市長に提言します。」となっている。ここでご理解いただきたいのは、市民参加・自ら考え行動する仕組みづくりが大事だということである。このことを踏まえて、この部会で議論してきた方向性と想いを部会長報告としてまとめてあるが、この内容でよろしいか。

—各委員了解—

2 まちづくり政策提言について

佐藤部会長：これまでの議論を踏まえて、提言書たたき台のまちづくり政策提言とマトリックス表を照合し、抜けている意見や足りない部分がないかなど確認していただきたい。逆に、提言に入れなくて良いと考えられるものがあれば整理していきたい。

- 自治基本条例の中に「市長等は、広く市民の意見を聴き、その意見を反映させるための仕組みづくりに努めなければならない。」とあり、私はこの「市長等」の中には当然市議会議員も入っていると思うのだが、市民委員の意見と市議会議員の方針の整合性をとる必要があるのではないかと。市議会議員は行政のプロであり、市民委員より権限も強いので、我々市民委員と市議会議員が討議する場を設定したり、市民会議での議論の状況を議会に報告するなどしてほしい。また、市議会議員の活動内容の情報提供や常任委員会等を見学させていただくなどの機会があれば良いと思う。

佐藤部会長：私としては2点考えている。1点目は、この市民会議は市長に提言をして終了となるが、部会で議論しているマンパワーを活かした仕組みづくりの中で、市民が意見をどんどん言える、それこそ市議会議員も市の職員も学生などもみんなと一緒に政に参画し、行動できるような仕組みづくりをこの市民会議の中で作り上げる。その中から色々なものがアイデアとして出てきて、これは実現できるとかこれは無理だ、という様々なディスカッションができるシステムづくりを考えたいと思っている。

もう1点は、実際にはこの市民会議は限られた時間で行っているが、自治基本条例では我々市民の意見が上位にあることになっている。そして、この総合計画策定のための市民会議は、自治基本条例ができてから初めての開催である。我々は新しい仕組みをつくったり、その中で我々の意見を反映してもらえらるポジションにいる。それをもとに市議会議員の方が勉強したり調査したり、あるいは我々が作るシステムの中で一緒にディスカッションしたり、といったことになっていけば、本当の意味でのまちづくりができるのではないかと考えている。これまでのように行政が一方的に実現できる・できないを判断するのではなく、自治基本条例に則って市民協働でまちづくりができるような仕組みづくりをこの市民会議の中できちんと市長に提言していくべきだと考えている。それで今日の資料として、第1回市民会議での市長の挨拶と自治基本条例の条文、市民会議の設置目的を用意した。

- 江別市をより良いまちにするために、我々市民の意見を役立ててほしいので、期間限定の市民委員よりも、プロの市議会議員に我々の意見を行政に反映してもらうべきではないか。また、市民意見を反映するための新たなシステムづくりをするというのなら、この市民会議の6人の部会長に今後もずっと継続して市民の意見を行政へ伝えるパイプ役になっていただければ良いのではないか。それこそ1番の4大学連携になる。
- この部会は「高齢化・市民活動部会」となっているが、これは高齢化対策と一般市民活動という意味なのか、それとも高齢化に伴う市民活動という意味なのか。市民活動とは高齢化に関してだけのことではないと思うが。

佐藤部会長：高齢化と市民活動は分かれている。高齢化社会に伴う様々な問題を所管した部会だのご理解いただきたい。

- 短期のハードのところ「学校の空き教室を利用した高齢者が学べる場所の整備」とあるが、何を学ぶのか。また、ニーズはあるのか。実際に人が集まるかどうかかわからないので、現実的ではない。「学べる」を「集える」に変えてはどうか。「集える」には学ぶことも含まれるが、学ぶことを前面に出すのではなく、趣味や嗜好でもいいから集まることを重視した方が良い。

佐藤部会長：人を集めるのは大変かもしれないが、自らやってみたいとかNPO等でやってみたいという方もいるかもしれないので、実際に実行できるような仕組みをつくっておくことが重要である。そうすれば、例えば試行的に半年間やってみて

人が集まらなければやめて、うまくいけば継続する、ということができる。今までのように行政に任せるのではなく、市民協働で市民の中でやりたい人が手を挙げて協力してやっていくということ。そして、できる・できないの判断は実践してみたら決めることである。例えば福祉施設のバスをうまく利用する、という意見もあったが、それも本当にできるのかどうかはシミュレーションをやってみないとわからない。だから実際に実践できるような仕組みをつくれればよい。

- 現在も蒼樹大学という高齢者が学べる場所があるが、これから高齢化が進んで元気な高齢者が増えてくると、それとは違うサークル的なものや、実践的なものづくりをするような場が出てくる。そういったものもこれからは「学び」の概念に入ってくるのではないか。
- 内容的にはコミュニティ広場というイメージだと思う。何をやるかより、まずはそういった場をつくる、ということがここでの提案となる。学べる場所の整備という文言は削除して「学校の空き教室の利用」としてはどうか。また短期のハードと中期のハードに同じ「市民が集まる場づくり」という括りがあるので統合してはどうか。
⇒ 文言修正。短期のハードに統合。

- 高等養護学校の誘致は江別市や市民のためになるのか。道立学校であるから、市民以外も通うわけだし、江別市にお金が落ちるといようなものではない。それよりも、人口減少への対策として、札幌市からの転入増加策を考えた方が江別のためになるのではないか。

佐藤部会長：そういうアイデアもきちんとシステムの中で市議会議員や市の職員、学識者など色々な人たちとディスカッションして、データをしっかり集めて実現できそうなものを実施していく。何でも実施できるわけではないので、やはりこれまでとは違う政策提案の仕方、市民協働でみんなで作って上げて初めて実現するという仕組みを市民会議として提案することが必要である。

- 短期のソフトに「高齢者が交流する場づくり」とある。場づくりというのはキーワードで様々なところに出てくるが、「若者」という言葉が入っているものがないので、「若者から高齢者までが交流する場づくり」としてはどうか。
⇒ 文言修正。

- 短期のハードづくりの「若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり（コミュニティ活性化に貢献する人づくりとそれを持続する仕組みづくり）」には具体的な例が記載されていない。資料として配られた「大学COC」のようなものとして、もう少し大きい江別市民の生活の中でのCOCをつくるということかと思う。若者も高齢者も役所も学者も議員も入ったような組織をつくらうというのが提案になる。それを大学に限定したものが「大学COC」ということか。

佐藤部会長：江別市が中心となつてつくる組織に所属しているのが4つの大学で、4大学に上下関係は無く、協力できる分野で協力していく。どこかの大学に依頼する

と、他の大学がそっぽを向くというのでは困るので、江別市自らが組織づくりをして連携をはかり、4大学それぞれの特徴を活かしていく。

⇒（事務局）各団体が色々な立場で協力しながら取り組むというのはよいのだが、文科省の「大学COC」はあくまでも大学を今後もっと活性化するために活用すべきシステムを示したものであり、そのシステムをそのまま行政との協議の場に持ち込むというのは、大学の自治権を行政が侵害してしまうことになる懸念がある。

佐藤部会長:そこまで行政に求めているわけではないので心配はない。当然強弱があって、あまり関わりたくないという大学もあれば、積極的に関わりたいという大学もある。私が考える江別COCというのは、「大学COC」とは別で、江別市がコミュニティの核をしっかりとつくって、大学を含め、市民・学生等様々な方々が連携をしながら自分たちでアイデアを出したり色々なことに取り組める場をつくろうという発想である。その中に、4大学もシンクタンクとして入っているというイメージである。

○ この江別COCとでも言うような内容の意見をどこにいれるべきか。まちづくり政策の中に例示として入れるのか、それとももっと表題的に部会長報告の中に江別市全体のCOC機能・組織づくりをしなければならないという内容を入れるか。

佐藤部会長:「若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり」の具体化として江別COCとしたい。

⇒ まちづくり政策に例示として追記。

○ 大学は大学でまず4大学の連携があって、それから一つ一つの大学の中でこの考え方を実践する仕組みがあり、あとは他の市民団体や自治体を含めた中でどうやって組織をつくっていくかということになる。難しいが必要なことだ。バスの問題などが良い例だが、民間バス事業者や病院、自治会、そしてもちろん市も関わらなければならないし、関連する研究をしている大学も頭脳として加わらなければならない。そういう時にこのCOCのようなものがあれば、協力体制を構築して実践していくことが可能になる。また、そのようなシステムにおいては、やはり市の関わり方がキーポイントになるのでは。過去の自分の経験から言っても、人の問題やお金の問題がクリアできなくて続かなくなる。単純に営利目的であれば、続かなくなったら終了で問題ないが、市民活動となるとそうはいかない。継続性を担保するためにはプロである市も一緒になって、同じ目線で役割分担しながら取り組むことが必要である。

○ 中期のハートづくりに「江別市自治基本条例の基本理念の浸透」とあるが、中期で良いのか。もう条例は施行されているので、理念の浸透は短期的に取り組まなければならないことではないか。

⇒ 短期のハートづくりに移動。

○ 江別市を魅力的にする方策の一つとして、学童保育の問題が非常に重要である。学童保育は5時くらいで終わりではないかと思うが、親が6時でないと帰れないとなると

子どもの行き場が無い。全市的にやるのは無理にしても、何ヶ所かで延長するなどしてはどうか。

⇒（事務局）学童保育の延長については、子育て関係を所管している暮らし・定住部会で意見が出ており、議論されている。

佐藤部会長：次に、まちづくり政策の中から特に力を入れていくもの、重点化すべきものを判断していきたい。

- ハードの短期「高齢者の生活利便性向上・買い物対策」というのは重点化すべき。民間バス・送迎バスを活用した買い物対策というのは、課題がたくさんあり難しいかもしれないが、今後重要になってくる問題である。
- ハードの短期「市民が集まる場づくり」も重点化すべき。
- 中期のソフト「介護保険制度外の江別独自の在宅福祉サービスの創設」は重点化すべき。介護保険や医療保険等の制度があって、制度の枠内で各事業所がサービスを提供しているわけだが、現場ではもっと別なサービスのニーズがあるのが実情である。関係する事業者の連携がなく繋がりが薄いため、協力して新たなサービスをつくろうと考えている人がいても実現できない。独自につくらなければならないサービスなので、関係者が知恵を持ち寄って取り組むのは意義がある。

佐藤部会長：であれば「創設」ではなく、「充実」と言い換えておいた方が良い。また、介護保険だけに限った話ではないので「介護保険制度外」という文言も削除した方が良い。

⇒ 「江別独自の在宅福祉サービスの充実」に文言修正。

佐藤部会長：短期のハードづくり「若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり」は大きなテーマであるので重点化すべきものとする。ソフトもハードも含まれてくることであり、これがあって様々な取り組みにつながっていくものであるから、重点項目のトップとして戦略のテーマとなる。

中期のソフト「4大学・大学生が活躍するまちづくり」も重点化すべき項目としたい。

- 関連して中期のハードづくり「学生と地域の連携」も重点化すべき。

佐藤部会長：短期のハードづくり「自治会活動の活性化」と「市民活動の活性化」は重点化すべきと考える。

- 中期のハード「高齢者福祉の充実」と「障がい者福祉の充実」はどちらも重要である。

佐藤部会長：では「高齢者・障がい者福祉の充実」と一本化して例示を整理したうえで、重点化する項目とする。

短期のハードづくりに移動した「市民自治意識の向上」もまちづくりのベースになることであるので重点項目とする。

道立高等養護学校の誘致が現実に進められていることから、ハードの短期「障がい児福祉の充実」も重点項目に入れておく。

3 戦略テーマ提言について

佐藤部会長：私が悩んだのは、大きなテーマである『若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり』と、3つのサブタイトルである『福祉』・『元気なお年寄』・『市民活動』をどのように表していくか。私が作成したたたき台では、大きなテーマがあってサブタイトルがあるという括り方にしているが、それでは括れないものもある。例えば病院や健康については『福祉』では括れないので、『保健・福祉・医療』と置き換えるべきかどうか。他に『市民活動』のところで括れないものが出てきていないか。また、順番はこれで良いか、整合性も考えねばならない。3つの大きなキーワードである『福祉』・『元気なお年寄』・『市民活動』に沿って、3つに戦略テーマを分けるべきかも迷ったが、どうしても『若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり』が大事ではないかと考え、この戦略テーマ1つにまとめた。

また、立案の背景に書いたように、江別市には4大学2短大ある。他の自治体を見てもわかるように大学が撤退するとか、短大がなくなるという状況が今の社会の現状である。したがってその受け皿になるべく、国が地域再生の核となる大学づくりを示した「大学改革実行プラン」（平成24年6月5日）に沿った施策を、市が自ら提案して大学をまとめていくことが特に重要だと考えている。配布した大学COC（Center Of Community）の資料にあるとおり、大学の様々な資源を活用して地域と連携し、大学と地域を活性化するという文部科学省のプランが出されており、各私大はこれに沿った取り組みをしなければ生き残れない状況になることから、この市民会議の中で4大学を活かして大学と連携しながら仕組みづくりをしていくことを提案したい。

それでは、まず戦略テーマ名についてはこれでよいか。また順番も『福祉』・『元気なお年寄』・『市民活動』でよいか。

- テーマ名はこれでよい。また『元気なお年寄』が『福祉』と『市民活動』をつなぐというイメージで、この順番でよいのではないか。

佐藤部会長：戦略テーマの中身について『福祉』・『元気なお年寄』・『市民活動』と3つに分けて記載するか、それとも私案のように1本にまとめた記載とするか。

- さきほどまちづくり政策から重点項目として選んだものの中で、『元気なお年寄』に関する項目が少なかったので、3つに分けずに1つにまとめて記載した方がよいのではないか。

佐藤部会長：では1本にまとめて、重点項目としたものを戦略テーマ実現への方策に記載していくことにする。私と事務局でやり取りしながら文章化して記載しておく。

- 「どんな状態にしたいのか」の文章で、「4大学連携モデル」と「えべつ未来づくりのための「COC（Center of Community）」」の順番を逆にした方がよいのでは。未

来づくりのための COC の中に 4 大学の連携が含まれるという流れである。「産学官連携」も 4 大学連携についてのことであって、未来づくりのための COC はもっと大きな枠組みであるが、この順番だと狭い意味になってしまう。

佐藤部会長：「えべつ未来づくりのための「COC (Center of Community)」」を前に持ってきて、「産学官連携での新たな 4 大学連携モデル」がその中に含まれると読み取れる記載に変えておく。

ここまで議論してきた内容で事務局と調整しながら戦略テーマの文章化をさらに進めておく。そして、もう一度部会を追加で開催して委員のみなさんに内容を確認していただくことにする。